

姫剣士エルフ

自らの精靈の嫁奴隸

ソフテル

小説 武猛
挿絵 雪月竹馬

第一章 エルフ王女と侍従

第二章 届辱の処女喪失

第三章 偽りの娼婦

第四章 汗噴く乳房

第五章 虐悦への堕落

第六章 狂氣の結婚式

登場人物紹介

Characters



ソフィエル・フォルアルト

フォルアルト国の人気王女。剣技に長けておりその腕は城内でも一二を争う。病床に伏した父王のことを心配している。



アルヴィア・スプレンター

ソフィエルの侍従として常に行動を共にする短髪の女性。剣と共に精霊魔法を操ることができる。

オルグスト・フォルアルト

現フォルアルト国王。一ヶ月前から体調を崩し、ソフィエルの結婚と次期王位のことを気にかけている。

バルド

長い間オルグスト王に仕えてきた大柄なハーフエルフの男。

イル・ド・ハミュエル

バルドと共に行動する魔術師。父王の主治医でもある。

「失礼、君の料理が楽しみだと思つていましたら、腹が鳴つてしましました。はつはつは」
ありがとうございますと一礼をした料理人は、気付く様子もなく準備作業を続けた。まさかテーブルの下で、清楚な王女が肉棒を咥えているとは考えもつくまい。

（んっ、臭いっ……う！　んおごつ！　こ……この感覚嫌あつ、喉が裂けちやうつ！　おおおおっ！　たつ、助けてえ……）

目を白黒させている彼女は肉棍棒を奥まで突っ込まれ、幹に喉を圧迫されて吐き気を催しても排出する隙間もなく、鼓動をさらに高鳴らしながら首を小刻みに前後していく。

（……こんな無様で恥ずかしいところを、もし見られてしまつたら……）

間もなくして全ての料理を並べ終わると、料理人はお辞儀をして扉を閉めて出ていった。直後にバルドは鼻息を荒くして、王女の頭を物のように扱つて激しくスライドさせていく。

ズチユズチユ、ズチユッポッ！！

唾液の跳ねる水音が部屋いっぱいに響き始め、彼女の喉が膨らんだりへこんだりを繰り返す。彼女は手を使つて押し退けようと身を引いていくが、それ以上の力で棍棒を口の中へ収められる、その行為を幾度となく繰り返される。最早ソフィエルは自分でも何をされているのかわからず、肉棒を扱くだけのただの道具のように、彼にされるがまま、カボカボと喉を削っていく。

（口の中でバルドのモノが、膨らんできてるうううつ！）

凶惡な肉の棍棒はさらに膨張すると共に、前に飲まされた淫液の効果が残つてゐるかの

ように、腔内だけでなく身体中が熱くなつて秘下部までもがじんわりとし、シルクの下着に作つた染みを広げていつた。

（はあつ、こ、こんな醜いものを飲み込まされているのに、どうして気持ちよくなつてくるの……？）

カリの部分が体温の高い喉に引っかかると、摩擦感が堪らないのか彼は興奮しまくり、身をブルブル震わせだす。

「もつ、もうイキますよ、ソフィー様つ！ 特製スープをたっぷり味わつてくださいよつ！」

ビュクビュクッ！ ビュジュウッ！ ビュジュウッ！

「んぼおおつ！ んぶううつ!! ぼ……むううおおつ!!」

小刻みに快楽に浸りながら、幹の太い肉の竿を彼女の食道の奥へ突っ込む。王女は直に大量の白濁を流し込まれるが拒絶することもできず、すぐに息を詰まらせて逆流させてしまう。しかし出口が塞がれているため、吐き出すこともできない。

ゆつくり肉竿が引き抜かれると、彼女は堪えることなく嗚咽と一緒に白濁を嘔吐していく。逸物はまだ脈動し続け、王女の鼻の上や頬、唇の周りにまで濁液を飛ばす。

「ふうう……。お食事はいかがでしたか？　おやおや、吐いてしまうとはもつたいないことを。くうつくつくつくつくつ」

「ごほつ！　ごほつごほつ……はあつ、はあつ……つ!!　はあつ……、わ、私のアソコに

入れたものを、口にまで入れてくるなんて……。この鬼畜っ！」

ソフィエルは喉に混濁液を詰まらせながら、バルドへ恨み節を吐き出す。溢れ出した液体は衣服の染みを広げ、胸の谷間にも流れ落ちていった。

ハーフエルフは表情を変えることなく、彼女を見下ろしてさらなる要求を突きつける。

「この美しい顔を汚すのも堪りません。……いえ、ザーメンを滴らせたその表情も、また美しいですな。ほら、まだ終わっていませんよ。ちゃんと綺麗にして下さい」

彼の冷ややかで鋭い眼差しと白い粘液に塗れた特大ペニスを突きつけられ、王女は怒りと屈辱感に唇を震わしながらも、もう一度舌を伸ばして粘液を削ぎ落とす。

（これからも毎日こんなことが続くというの？　バルドのコレなんて、ただおぞましいだけよっ！　うつ、うううつ……）

渋いものを食したかのような顔で亀頭や竿を舐め回すソフィエルを眺め、バルドは心中でほくそ笑む。彼女自身気付いていないが、汚れた衣装同様、彼女のシルクのパンティには染みどころか、溢れた淫汁がボタボタと滴っていた。

またある昼下がり、王女は宮殿内の広い廊下でバルドに呼び止められた。彼女より体格が二倍近くある彼がほど距離を開けずに身体を寄せてくる。

「なつ、何なの？」

ソフィエルは威嚇するように目を見開いているが、内心今度は何をされるのかわからず

ドキドキしていた。

「あなたの凛々しい後ろ姿と、スカートから覗く艶めかしい太腿を見ていたら、私のチンポがこんなになつてしましましたよ」

バルドは見せつけるように、彼女の身体へ密着し腰を突き出す。エルフ王女は身を引こうとするが抱擁されてしまい、衣服越しに盛り上がる物体が腹部へ押し当たつていく。布を通してもわかるくらいに隆起し、熱を放っているのが伝わってくる。

（なんて下品な奴！）

カツと頭に血流が巡っていくが、人質のことが思い浮かび、彼の腕を払いのけられない。何の予兆もなく、ハーフエルフは強引に唇を奪う。

「ちよ、ちよつと突然すぎつ、んふうつ！ ふううつ……んぶう……」

ただ唇同士を合わせるだけではなく、彼は舌も侵入させて彼女の舌を求めていく。一方のソフィエルは上顎に舌をくつづけて抗おうとするが、彼の舌に搦め捕られてクチュクチュと唾液を鳴らすだけ。

（こつ、こんな場所で、キスまで許してしまうなんて……！）

彼を憎らしく思うと同時に、誰かに見られるかもしれないような場所ですらいとも容易く行為を受け入れてしまう自分自身に嫌悪していた。

バルドは深い接吻の間に手をスカートの下に潜らせ、パンティーの上から指二本を中心の筋へ運ぶ。添えた二本指をゆつくり上下に擦っていくと、彼女は抵抗しようにも理性が

蕩け始めているため喘ぎを漏らすことしかできなかつた。

長いディープキスが終わり、唇が離れると透けた粘液の橋が一人の間に架かり、彼女は半ば呆然と頬を赤くして下唇から粘液を零していく。

「ふう……情熱的でしたね。それでは早速始めましょう、ソフィイエル様」

「んぱつ！ んはあ……つ、は、始めるつて、何を？」

思考速度が落ちてきた彼女を尻目に、彼はズボンの中央の隙間から既に硬直しているペニスを引き出す。この場で淫行を始めようとすることに王女は驚き、バルドを押し退けようとするが逆に壁際に押さえ込まれてしまう。

「ちよつ、ちよつと待つてバルド！ まさか、ここで……？」

そうですと、彼は怪しい笑顔を振り撒きながら頷く。

「他人に見られてもいいではないですか。私達の愛の姿を見せつけておけば、どんな関係か一目瞭然です。きっと誰もが私達の仲を認めてくれるでしょう」

「そんなこと、あるわけないじゃない！」

眉を吊り上げ、赤らめた表情で必死に抵抗を見せるソフィイエル。しかし、

「私のチンポは、もうこんなになつてしましました。それにソフィイエル様のココも、こんなになつていますよ？」

彼はにやつきながら、擦っていた指を彼女へ見せつける。二本指はトロトロな粘液を纏い、それを確認したソフィイエルは顔がかあつと燃えるように熱くなり、ぐうの音も出ず目

線を横へ逸らしてしまう。

（ううつ、なんで私の身体、こんなにいやらしくなつてゐるの……？）

肉体が素直に反応してしまうことに対し、彼女は戸惑いを隠しきれなかつた。ふと気がつけば王女の身体は壁側を向かされ、バルドはスカートを捲つて柔らかで豊満な尻肉の谷間へ豪棒を擦りつけていた。

「あつ！ ひやうつ、ちよつと駄目つ、こ、ここでなんてつ……」

尻の割れ目をなぞられてこそばゆさにピーンと背筋を張つていると、パンティーをずらし濡れそぼつた淫肉の入り口へピタリと鉢先をあてがわれる。

「静かにしていれば、わかりませんよつ！」

「そんなの無理……いいいいおおつ!!」

ズブズブッと一気に肉凶器を膣内へ埋め込むまると、ソフィエルの肉体に快楽の雷が走り、思わず悦び声を漏らしてしまった。

膣肉は既に潤つており、極太をずぶずぶと受け止めていく。それでもきつい締めつけを残したまま特大ペニスを挿入できることに彼は機嫌をよくして、彼女の腰をしつかり掴んで奥底へ肉鉢を叩きつける。

「はうううつ！ やつ、やめてつ、こんなところでつ、なんてえ……こつ、声が出ちやうううつ」

彼女は小声で喘ぎを堪えながら金髪を振り乱し、両手を壁について力の抜けた身体を支

えていく。

(はひいつ！……こんな獣みたいな格好でするなんて、いやあああつ！)

五回ほど突かれた後、行き止まりに到達して硬い箇所を叩かれると、彼女は下半身の奥から脳髄までも痺れさせて、視界が真っ白になつてしまふ。

「はああ——つ！だつ……ダメつ、そんなにつ、突かないといつ……でえええつ！」

「おやおや、そんなに大声を出しますと、誰かに気付かれてしますぞつ！」

彼に言われてハツとし、奥歯に力を籠め、眉を歪めて声を抑えるソフィエル。誰かがくるかもしれない、そう考えるだけで本能的に彼の肉棍棒をぎゅっと引き締めてしまう。

その感触に彼は歓喜し、悦感に全身を震わせた。

「おおおつ、さらに私のモノを締めてくるとは、そんなに我々の淫らな姿を見られたいのですかな？」

「ちつ、ちがつ……んくうううつ！」

感銘を受けたかのようなふりをしながらも、容赦なく子宮口を強打していく。彼女は声を出すのを我慢しようとすると、子宮の入り口を突かれる度衝撃が身体中を巡つて呻き声を上げてしまう。

(はぎいつ！　ううつ、バルドの大きいのが入つて苦しいはずなのに、どうして気持ちいいの……？　んいうつ！)

最初のときと比べればもう痛みは消えていたが、好きでもない異性のペニスをいとも簡



絶叫と同時に充分たわわな乳房は、突き上げるように急激に膨張して高熱を発していく。尖端もさらに充血し、むくむくつと隆起するだけでなく、横幅も増して乳首そのものが大きくなってしまう。

「くっくっくっくつ……成功したようですね。見事により美しい肉体に変化しましたよ
王女様」

「はあ、はあ……ああ、あううう。私の胸があ……また大きくなつて……ううつ、熱くて切ないのおおおつ！」

ソフィエルは熱に浮かされた寝言のように呟き、自分の傍で双乳が一際膨らんでいく様を見て驚愕していた。

(これじやあ本当に、私の胸が肉の塊になつて……ううつ)

ワンピースがさらに縮んだように胸囲がきつくなり、胸の重みが増して完全にバランスが崩壊してしまった自分の身体に対し嗚咽を漏らす。異常な肉塊からの発熱により頭がボンボンとし、大きく乳房が鼓動を打つようにビクビク跳ねていくと、心臓が二つ剥き出しになつているような気がしてくる。乳輪もブクッと張りつめ、その桃色の先端も腫れぼつたくなるだけでなく、だらしなくによつきり数倍にも伸びていく。

「ほほう、これは見事な成長をしましたな。一体どんな感じなのでしょう?」

彼女の近くで観察していたバルドは肉球体に手を伸ばした。

「ひやううつ！ さつ、触らないでえつ、あひいつ、ふひやああああああんつつ！」
ビュルビュルツ……ビュビュツ。

両手を押し当てただけで肥大した乳頭から白汁が勢いよく噴き、胸を張りながら喘ぐ。
「なんと、手を置いてだけなのに、もう母乳を噴きましたか。これは揉み回してしまうと
どうなるんでしょうなあ？」

やめてと喘ぎ混じりの即答が返つてくるが無視し、肉塊へ圧力をかけて手を沈めていく
と、またもや乳白汁を噴霧して彼にかかるてしまう。いつそう巨大化した爆乳は弾力があ
り、手を押し戻そうとするほどの肉感があった。ハーフエルフはその感触に喜び勇んで、
驚掴んだまま捏ねくり回す。

「ふきゅうううつ、ひやめつ……んくうつ、きつ、きつきより感じちゃうからあひやき
いいいつ、いひやああああああんつ！」

胸に触れられているだけでソフィエルは今まで以上に肉悦を感じ、腫れぼつたくなつた
乳首から母乳を噴き出す度、脳がチカチカして軽い痙攣が止まらない。

(くううつ……こつ、この感じはああ……)

彼女は強引に興奮させられ、局部から新たな蜜汁を滴らせていく。

揉み回す都度乳汁を撒き散らす乳頭をじっくり眺めると、バルドは手を止める。

「このおっぱいの感触はなかなか堪りませんが、もつと興味が惹かれるのはココです。果

たしてどうなつているのでしょうか？」

両手の熱感に踊らされていたが、離れてしまふと次第に胸全体がジンジンと疼き、吐息が荒くなつてしまふ。にやついた彼の指先によく気がつくと、思わずあつと叫ぶ。

「ちよつ、ちよつと待ちなさいっ！　まつ、まさか…ふひやあああつ、だつ、だめつ…もう狂つちやうからあああつ、んんつ…」

人差し指を立て、垂れ流しになつている乳房の頂点へ触れていく。

「狂うにはまだ早いですよ、ソフィー様。お楽しみはまだこれからなんですからな」

下衆な嗤いを飛ばしながら指先をゆっくり押し込む。すると乳頭自体が乳輪まで沈み込み、先端に開いた孔が指を咥え込もうと広がつていった。

「ふうひやああつ？　あつ、ああつ……バつ、バルドの指がああ…おっぱいの中に、入つてくりゅうううつ！」

潤いもあつてごつごつした指は、案外すんなりと乳首の内側に第二関節まで入り、王女はそれだけでぞぞぞつと背筋から悦感を駆け上がらせる。

指先をもつと根元まで深く埋め込むと爪の先に温かな水分を感じた。引き上げようすると乳首が吸い付いて離さない。

「はひやつ、だめつ、だめえつ！　乳首が捲れひやうううつ！」

ハーフエルフは独特な感触を面白がり、乳房の中へ突っ込んで爪を立てて搅拌する。グ

チャグチャと水音が聞こえ、引いてはまた攪拌の繰り返し。

乳肉内を搔き回されるだけで脳内は痺れてゆくが、痛みを感じないこと自体が恐怖を驅り立てていく。

「ふつふつふつふつ……。これは実に面白いですなあ。ですがまだまだ終わりではありませんぞお」

一気に乳首から引き抜くと肉塊が跳ね、指先で堰き止めていた乳液が洪水の如く溢れ出し、また軽くアクメを感じて脳内が光に包まれてしまう。

「ひやひいいんつ！ はあ、はあ……も、もうこれ以上はだめえ、だめなんだか……」
絶頂による疲労が溜まっていたが、吊り上げて睨む目つきだけは唯一の抵抗だ。

しかし彼はそんな王女に口角を上げて見せながら台から降り、横についているスイッチを切り替える。すると彼女を放さなかつた鉄の鎖が伸び、両脚の縛りは解かれずに彼ら二人に身を起こされた。鎖はある程度しか伸びずに両肘は折った状態で、手首は首の高さまでしか上げられない。

胸を張り出す形で座らされると、双乳がずつしりと重力で引っ張られるのを感じる。

(こ、これが私の胸……なんだ。こんなに大きくなつて……あぐうつ、ぶ、無様すぎる……)
ワンピースのひし形の隙間から零れた肥大化した乳房は、もうこの服に収まることはないだろう。一時期もうちょっと胸があればと思つていたことはあるが、ひと房が自分の頭以上に大きくなつてしまつては嫌悪感でいっぱいだ。しかも指を抜かれてからは、乳房全

体の火照りが増大し、ジンジンと疼いてくる一方である。脳髄は火照りの支配によつて思考が落ち、呼吸が乱れ汗は吹き出して、それが双乳を伝つていくことすら悦楽に感じてしまいそう。

「どうしましたかな、ボーッとして。そんなに私のチンポが愛おしいのですか？」

「……そつ、そんなことつ：：はあはあ……あるわけないつ……じや、な……い」

憎らしきバルドの声ではつとするが、脳が半分焼け落ちたかのようで思うように文句を返せない。

これから行うことは彼自身も初めてであり、鼻息を荒くして興奮が高まつていくばかりで、その肉棍棒も膨れ上がつていて。台に上り期待の高まりに心躍らせながら、竿を握つて左の肉塊の先端に亀頭を向ける。

「こつ、こんなのつ入るわけがああつ、あつ……ああつ、ひやめつひやめえつ、絶対にらめえええつ！」

常識で考えても不可能なことだけに、恐怖で顔を引き攣らせるソフィイエル。

乳頭と肉鉢が触れ合い、もつと押し込んでいくと乳輪ごと乳肉へ埋まつていく。モープチモチツズブズブジユブウウウウツ。

「あつ……あ、あ、あ、あ、ああつ……うそつ、入つてくりゅう、バ、バルドのでかいモノが、おつ、おっぱいの中に——つ！」

自分でも乳首が広がつて亀頭を受け入れていくのがわかり、それだけで喜悦を感じてしまつた。

まう。だがハーフエルフの逸物は留まらず、どんどん竿が沈んでゆく。

「……ああ、そ、そんなつ……あつ、あつ、ああつ……こつちでも咥えちゃつてているなんて、ふきゅうううんつ……し、信じられないいつ！」

乳房と肉棒の結合部を眺めてただただ驚くばかり。痛覚が伝わってこないため怖いとうより悦楽感の方が勝り、過呼吸しながら目を丸くさせる。

乳肉を持ちながらひたすら逸物を埋没させていくと、パルドは熱感と狭さで唸りつつもついに全てを詰め込んだ。

「おおおうつ！ 見て下さい、ソフィー様。私のチンポが全ておっぱいの中に入つてしましましたぞお。ご気分はいかがですかなあ？」

「ひやあ……ひい……こんなあ、こんなのつて有り得ないのにいい……私のおっぱいがあつ……あ、あ、あつ、熱いつ、パルドのおちんちん、熱いのぉ——っ！」

乳肉内に埋まつた彼の肉棍棒の形が手に取るようになればまでわかり、肉棒の温もりを感じながら吐息が荒くなつていく。そして左の肉塊全体がウズウズと痺れてくれる。さらに深いところに乳液が溜まり、代わりに秘芯から止め処もなく牝汁を吹いてしまう。

「バチンッバチンッ！ ビチンッビチーンッ！」

「ぐひいいつ？ いぎい……おお、おっぱいなのにい、かつ、感じてるう——つ、ひやぎゅうううつ！」

腰で乳肉を叩き始めると、肉の詰まり具合がよくて存外に気持ちがいい。しかも出し入

れを繰り返すほど、乳管は温かな液体に潤つてもつと官能が昂ぶつていく。

「くっくっくつ、ソフィー様も悦がっちゃって、そんなに気持ちいいんですか？ そう、もうあなたのおっぱいはオマンコと化したのです。ただの性欲処理の孔としてね。くううくっくっくつうつ！」

「ああ……おおつ、ほおおおおおおおつ！ オお、おっぱいがあ：串刺しにひいひいひつ、なつへるうううつ……おぎゅうういいいいいつ！」

彼に罵られても細い耳には届かず、乳肉を擦られる度悦がり狂う。長大な肉竿が心臓まで届いて潰されるのではないかと思うが、ドシッドシッと叩かれるのが逆に心地いい。脳髄はとつぐに焼き切れ、まともな判断ができなかつた。肉棒を咥え、締めるように竿を扱く様はまさに肉壺と同じ。

逸物に乳肉壺を突き続けられると右側の乳房も疼き、自然と乳汁がトプトプとだらしなく垂れ始める。

(あふうう……何だか右の胸も母乳を出して、疼いてくるう……)

右胸から乳液が漏れていくのに気付いたバルドは、傍観者になつていて魔術師を手招いて誘う。

「イル、どうやらソフィー様は右にもチンポが欲しいそうですよ」「ふふつ、私のトゲトゲチンポが恋しいですか、ソフィエル様？」

彼も台に上がり、肉鉾を卑猥に膨らんで汁を零す右の乳頭へあてがう。

「そつそんなことにやつはぎゅいいいんつ！ しょ、しょんな凶悪なモノ、入るはずがあ
はああつ……ない。おつぱいが、こつ、壊れひやううぐううつ、ぎゅひいいい
いんつ！」

肉竿に生えている多くの棘を見て戦おののくソフィエルは、上半身を左右に振つて挿入を防ご
うとするが、あつけなく魔術師の手に捕らえられた。茎の太さだけならバルドの方が肉厚
だが、棘も含めると彼よりも幅がある。

「私は魔術師だからな、自分がかけた魔法がどのような効果をもたらし、いかなる結果を
招くのかが知りたい。今回二人も実験体となつて、最良のデータを取ることができるのは
嬉しいことだ」

（……悔しいつ。私達をただの実験体としかつ、んふうんつ……思つていなかつたなんて
え。ほつ、本当に卑劣なひやあああつ！？ んあつ、んくうつ、奴らだ……わつ！）

彼らへの憤りを強くするが、悦楽に痺れた肉体と理性を削られていく中で、唯一の抵抗
は眉を顰めることだけ。

イルは冷やかな笑みを漏らしながら、固定した乳房の尖端へ棘肉棒を押しつけていく。
すると右の乳首もジユブジユブとはしたない音を立てながら、易々と魔術師の亀頭を飲み
込む。

「はああがつ……うつぐううつ……は、入つちやつとりゆうううつ、みつ、右もイルのオ
チンチンがあああああああつ！」

「……ほおおおうつ！ こつ、これは、アルヴィアと勝るとも劣らぬ、なかなか淫靡な乳首だあ、くくくくくつ」

挿入された瞬間脳内が煌めき、視界が靄に包まれていくソフィエル。けれどもこれから棘付きの肉茎を入れられることと、快楽しか感じない乳房に恐怖していた。

「さあ、次はトゲトゲが、おっぱいの中を犯すぞ。どうなるか、楽しみだ」

「いやいやあああつ、それ以上らめらめつ、んんつ……らつ、らめなんらからあああつ！」取り乱して左右に何度も首を振るが、魔術師は嬉々として棘竿を突入させる。紅に染まつた乳頭は内側から数多の突端の形を写すが、なおも湾曲した肉球体を歪ませんと突槍一閃で貫く。

「ごおおお——————つ、おつ……おおつ……おぎいいいつ、イルのオチンチンがつ……おっぱいのほおおぐうううつ、おぐまれぎでるううううううううつ！」

乳房の孔を通過したとき王女は仰け反つて上を向き、胸から湧き上がる肉悦でピリピリとした軽いアクメに脳内を襲われる。

イルがかけた魔法はただ巨乳化させて乳房内に孔を空けるだけでなく、全身の性感を何倍にも高める効果があつた。だからといって痛覚神経を殺したわけではなく、それを上回る快楽神経が脳中枢を支配していただけである。

「初めての二プルファックで、二孔同時はやりすぎだつたか？」

「いやいや、よく見てみよ、イル。姫様はマンコからスケベ汁を垂らして悦んでいるぞ。

ソフィー様は根っからの淫乱女なのだよ」

いつもならすぐさま「違う」と反論するところだが、頭の中が肉悦感でいっぱいになつてそれどころではない。王女は目の前がぼやけたまま、乳房と逸物の結合部を眺めるのみ。

（わたし……うぐうううつ、なつ、なんて恥知らずなの？　両方のおっぱいにオチンチ
ン挿入れられて、感じてるなんうひいいいつ！）

二本の肉棒が乳肉壺に埋まっているだけでこれほど喘いでしまうのでは、これから乳管を往復されたらどうなるのか考えると不安でならない。

何の合図もなくハーフエルフと人間の男らは逸物を送り込み、ドスンドスンと乳肉の奥を叩く。

「ひやきいいいいつ、んがあつ……おっぱいい、レ、レイプされてるによにい……あ、
あ、あ、うううんびいいいいいいつ！」

強姦の如く激しく乳壺を搔き回していくと、叫びのような嬌声を飛ばす。喜悦を漏らすまいと奥歯を噛み締めるが、唇を閉じられず唾液があちこちに跳ねてゆく。

逸物を突つ込めば乳肉はたわみ、引っ込めるに隆起したようにお椀のような元の形状に戻り、結合部の間から垂れてくるのは血流ではなく乳白汁のみだ。両胸をつつかれる度に理性が削られ、胸内が痺れっぱなしで痙攣が止まらない。

「姫様はどうやらイキまくっているようだが、まだ足りないようだ。アルヴィア、いつま

でも呆けてないで、こちらにこいつ

ソフィエルがまだ抵抗していると勘付いたのか、若く見える魔術師は侍従を呼ぶ。悦に浸っていたアルヴィアはフラフラしながら立ち上がり、実験台を上ると王女の変化した身体に気付く。

「ああーっ、ソフィーしゃま、もつと淫らで素敵なおっぱいになつてりゅう。よかつたれすね、はしたない姿になつて」

「……よ…よく、なつ…ないいいひいい…」

満面の笑顔を王女は顔を顰めて否定すると、アルヴィアはムスースと子供のように膨れてしまふ。

「まだソフィエル様は、自分が卑しい牝犬とは思つていらないみたいだからな。お前はマンコを舐めなさい」

イルの命令に素直に頷くと、侍従は四つん這いで近づいて台に上半身を密着させ、間近で膣孔をじっと見つめる。

「あ——っ、ソフィーしゃまのオマンコ、ザーメンとマン汁垂れ流してるうー。勿体なああい、はああむつ」

「あ、びやあああつ、はびゅうつ、んんつ：やつ、やめて、アルヴィイいつつ？ ひやつ、らめええ、舌でソコを搔きまわさないいいつ、れえええ——つ！」

止め処もなく溢れてくる混合液を見て目を輝かせると、アルヴィアは犬のように媚肉へ

嬉しそうにむしゃぶりつく。下半身からもジワジワッと悦感が生じるが、イルに感度を高められたためこれまでにない肉欲感が駆け上がる。アルヴィアはピチャピチャと舐めるだけでは飽き足らず、膣道に舌を突っ込んで残らず啜つていった。

「ざああめむも、しょふいーしゃまのじるもおいひいつ……すじゅつ、んじゅじゅ——うつつ」

「やめえええつ、しょつ、しょこつ、すすらにやつんきゅううううつつ！」

（こつ、この感覺うう……おつ、おんなじい！ 胸とおんなじらのおおおつ！）

アルヴィアに膣内を責められ、さらに容赦なく乳壺をも擦られると、ソフィエルは肉壺が三つになつたのではないかと錯覚を起こす。脳中枢も、肉体も乳肉壺の感触を既に覚え込んでいる。

ドスドスドスドスツ！ グジュジュウウウッ！

「あおおおつ！ ぎ、ぎもちいい——つ！ ゼつ、ぜんぶ、まつ……まんづんこお……才マンコになつてりゅうううつつ！」

肉棒一本で乳道を抉られ、舌でも膣肉を食られてしまい、理性を吹き飛ばして肉欲のみとなつたソフィエルは、本能剥き出しに高速で呼吸して腰を捩らせていく。

「ぐおおおつ！ おっぱいマンコがつ、私のチンポを締めてきますぞつ。これはまさに性器としか言いようがないわつ！」

王女の知らぬところで乳管が逸物を引き締め、彼らの肉悦を誘う。共に唸りながら、腰

の動きを加速させる。

夢中になつて媚肉を吸い上げていたアルヴィアは、眼前でプルプル震えていた肉芽に気付いた。

「うわああ、ソフィーしゃまのクリトリしゅ、でつかーい。……かぶううううつ！」

「あぎゅいいいつ？ ひぎゅうううつ！ あ、あ、あ、あつ：だべええつ、アルううう

つ、ク、クリをううつ、ずつと噛まなつ、ぐびいいいつ！」

小指の先ほどに膨らんでいた陰核を思いつきり噛まれ、大きく縦にガクガク身体を揺らした。突然舞い込んだ一撃に目をチカチカさせて昇天する。

乳孔でブボップボップと下品な音を鳴らしていると、ぎゅうーっと肉竿に圧力をかけられ、

肉棘が乳管に食い込む。

「んごおおつ、さらに乳マンコが締まるうううつ！」

「もう駄目だつ、射精るぞ射精るぞおおおううつ！」

「ドビュ——ツ！ ドビュ——ツ！ ドビュウ——ツブビュウ——ツ！」

「あじゅうううううつ？ むつむねがつ、あぢゅうううううつ：ふぎいいいつ？ イグイグうつ、乳マンごおつ、イグううう——つううつ！」

乳管に怒濤のような白濁の波が逆流していくと、ソフィエルは男汁の熱波を受けて天を仰ぎ、ひたすら叫ぶ。

「ブジヨオオオオ——ツ！」



この場でもあまり表情を変えない魔術師が命令すると、侍従は嬉しそうに返事をする。

「はい、アルヴィアはこの通り、人前でもハメてるくらいオチンポが大好きなんです。ですからチンポ好きの変態牝犬にいつぱいザーメンをぶつかけてくだしゃいつ！」

「ほ、本当に、いいのかよ……」

股間をパンパンに膨らませた男がイルへと問いかける。すると彼は侍従を半回転させ、対面の格好にすると、アルヴィアが嬌声を上げながら身を震わせる様子を見せつける。

「はおおおつ……おおううつ……いっ、子宮があ、イルしやまのトゲチンポでえ、ほおおおつ、いっ、イッてひまいまひたあ……しゅごいろおお……」

彼の突起物で膣肉や子宮口を引っ掻かれているというのに、アルヴィアは肉悦に声を震わせて酔っていた。

取り囲んだ男達は蕩けた顔をしているアルヴィアに滾り、ズボンを脱いで逸物を取り出し、彼女へと向けた。

「……ああ、あたひの周りにオチンポがいつぱい。この浅ましいアルヴィアにみなしやまの逞しいオチンポれ、ザーメンを恵んでくだひやいっ！」

自然と彼女は両手で肉竿を包み、素早くズコズコと扱き上げていく。魔術師も身を倒し、侍従が陶酔して悦んでいる様を見てにやけながら腰を振る。

「しかし驚きだな。王女といつも一緒にいる、お世話役だったはずのアルヴィア様が、実はこんなにも淫乱だつたなんて。知らなかつたぜ」

「しようなんでふう、アルヴィアは眞面目そうにひて いましたが、実はチンポとザーメン
が大好きな、イルしやまの忠実な牝犬奴隸なんれしゅう。わたひにたくさんザーメンをぶ
つかけてくらしやいっ！」

「なあつ、こつちも、こつちも使つていいよなつ!!」

彼女の告白に我慢が利かなくなつたのか、男の一人は筋肉で引き締まつた臀部に手を添
え、閉じていた肛門を熱く滾つたものでゆつくり貫いた。

「はおおおうつ、おつ、おひりにも入つてきたああつ、おほおおおつ！」

「ぐううつ、こつ、こいつはすげえ。マンコみたいに吸い付いてくるぜえつ！」

異物挿入の感覚に内臓から身体をブルブル震わせ、アルヴィアも叫ばずにいられない。
腸内へ突き入れた男も、ぬめぬめと竿の各所を蠢いて締めてくる感触に唸つてしまふ。

「お、俺だつてやらせろよつ！」

それを見て我慢できなくなつた一人が魔術師の身体を跨ぎ、反り返つた逸物を有り得な
いくらいに膨らんでいた爆乳の谷間へ、ズボッと突き入れる。男は自ら両房を持つて内側
へ圧縮していくと、反動で硬くしこつた朱色の突尖から真つ白な乳液が噴き出す。

「んひいいいつ！ おっぱいおっぱいいいつ、ミルク漏らしながら揉まれるのがいろいろお
つ！ オチンポも熱くておっぱいが焼けちゃうのおおつ、もつと滅茶苦茶に揉んでくだし
やいい——つ!!」

胸の内外から熱気が高まり、侍従の脳髄は最早焼けただれ蕩けそうになつていく。男も

胸肉の柔らかさと放熱で心地よくなり、ズボズボと腰を前後に動かしながら、両手で房を圧迫しては母乳を噴く、そんな繰り返しだつた。

「はへええつ、いろいろおつ、アルヴィアの全部オマンコらろおつ……おおはつぐぶうううつ？ んごおつ、ごぼおおおつ、んぼつんぼつむぶつぶぶうつ、ぶううんつ……」さらに増えた一人に灼熱色の髪を掴まれて強引に横を向かされると、口腔に逸物が襲いかかる。よつほど洗っていないのか、口の中が激しい腐臭で充満してゆく。始めは白目を剥いていたが、嫌がりもせず舌で丁寧に竿をねぶりながら吸い付いてゆく。

「……じゅじゅつ、んじゅつんぽつんぽつむぶううんつ……おいびい、おびんぽおいびいろお、むぶあんぐつ、んごつんうぶあぐつぐぶつぶふうん……」

侍従は嬉しそうな顔をして、積極的に口腔で肉棒を扱き上げてゆく。

「アル、チンポに囲まれてそんなに嬉しいのか？」

魔術師に問われると、彼女は唇から肉棒を離そうとせずにコクコクと首を縦に振る。今や逸物を扱くだけの道具にしか過ぎず、肉玩具として扱われることがアルヴィアには最も幸せなことになつていた。

それはソフィエルにとつても同様で、民衆に視姦されたまま、民衆に犯されていることを思うと、ますます被虐心が燃え上がつてゆく。

（あたしはもう王女じゃないの。大勢に淫らではしたない肉体を見られて悦ぶ、露出狂のマゾ牝オマンコなおお。もつとあたひを蔑んでえええつ！）

若い男に肉壺の入り口を痛いくらいに撃たれながら、王女は心から酔つてゆく。ドスツ

ドスツと叩かれていくと奥の入り口が緩み、若い男の肉棒を子宮口が包み込む。

「ううおつほおおおつ！ 王女さんのマンコ、すげえつ、子宮でもチンポを咥えやがつ

た！ 子を孕んでいるつていうのに、そんなに俺のザーメンが欲しいのかよつ！」

「ぶああい、ぽびいろおおつ！ ぽいびいいざあべんつ、じぎゅうんびいいいつ、んぼつ

んぼつんばんまつ、ぶつぶぶうつ……ぽいべぶうううつ！」
頭を押さえられて逸物で腔内を塞がれている彼女は、フェラチオしながら素直な悦びを告げる。

「何言つてるかわからんねえけど、相当ザーメンが欲しいんだな、この牝王女はつ！」

腔内で若い男の肉竿を扱き、ぽつかり開いている壺口の受け入れ態勢は充分に整つていた。既に肌と肌が触れ合うだけでも心地よく、何をされても気持ちよい極限状態が近づく。
「ううつ……てつ、王女の手コキで、もうイッてしまいそうだつ！」

左右で逸物を扱かれていた男共は堪らなくなり、二人とも亀頭が赤みがかり昂ぶる。彼らの唸り声をきっかけにして、彼女は両手のスピードを上げて肉竿の皮を扱いてゆく。
(早くつ、ザーメンつザーメンつ、早くぶつかけてええ——つ！)

「うあああつ、もうだめだつ！ 出るつ出るつ、出ちまううつ、お、おおおおおつ！」

ドビュ——ツ！ ドビュウ——ツ！ ドビユビユビユ——ツ!!

両脇の二人は身震いしながら同時に白濁粘液を飛ばし、ソフィエルの悦に浸つた顔

へ向けて精を放つ。灼熱の粘液はそのまま王女の輝く髪や美眉に付着し、ドロドロと垂れ流れて顔面を白く染めていった。白濁汁の臭いが直にブーンと鼻孔を突き、精神が昂ぶつていくにつれ、頬張りを舐め上げる速度も上がってしまう。

「んぼつんぼつんぶぶううつぶふうつ、んびいつ、んごつんごつんぐぶうう……」

息継ぎをも忘れ、ひたすら自らの喉元へ肉鉢をぶつけさせる。王女は同時に腰をうねらせると、濃い粘液が胸元やドレスにも付着し、それは太陽光の反射で光沢が増す。前後の肉孔は各々の肉竿を捩じり取るくらいに歪ませ、最大限に締めつける。

「うわああつ、このマンコすぐええつ、ギュウギュウになつてチンポが扱かれちまうううつ。こつ、こつちも射精しちまうううつ！」

「そつ、ソフィーのケツマンコもうねつてつ：こちらも果ててしまつますつ！」

バルドと他二人も射精感が高まり、三ヶ所で夢中になつて腰を振り、ドスドスツと肉同士のぶつかる音が庭内に響き渡つてゆく。

「おぼおつ！　おん、おんおおおおお——つ！」

（……もう蕩けちゃうつ、あたひの身体も頭も心も……全部がオマンコになつちやうの——つ！）

王女の脳髄は最早真つ白に溶けて、瞳の前に映る全てが清らかに思えてしまう。その中でも一段と輝くものが脳内に広がつてゆくと共に、激しい引きつけが内臓から背筋をブルブルと襲つた。



「んぶいいいつ、んぼびいいつビブウツビブウウツ、ビツぶぶうううつ！ ぐぼおおおおおおおおおおおおつつ！」

ドツビユウウウウウツ！ ビユルルルルウウツ！ ドプドプドプツ……。
「ぐううおおおおおおおおおおつ！ 射精るうううううううつ！」

バルド達もほぼ一緒になつて身を引き攣らせ、絶叫しながら濁汁を送り込む。菊門は緩急をつけて開閉を繰り返すと、その分勢いが増幅されて粘液を吐き出す。痛々しいほどに

腔肉も呼吸をするように食い締めては緩ませるの反復で、沸騰した白液を直接肉壺で搾り取る。

「ばあじゅううつ?! ぶいぐううつ、ばむ」つばだびぐう——ぶふうんつつ!!」

注がれた熱汁に即座に反応し、喉から頭を振動させていると、食道から直接胃へ注ぎ込まれた白濁液が逆流し、込み上げて唇の隙間や鼻からドロドロの液体が射出していく。

(あ……はあ……き、きもち、いいおお――――)

ソフィエルの蒼い瞳は上を向いたままで戻らず、意識は全てのものが空であるように真っ白になつていた。力なく腔内の逸物を離すと、だらしなく出している舌先から涎と混ざった粘液が垂れ、トロトロと豊乳を白く塗り替える。

すぐ傍のアルヴィアも男達の祝砲を受け、繰り返し昇天しながらも法悦に酔い痴れてしまっていた。

気がつけば王女の肉体は白濁一色で、肌の色を探す方が難しく、そのままバルドへ身を預けた。四人組はそれぞれ逸物を引き抜き、呼吸を荒げている。

「……ふうう、どうでした、ソフィー。みんなに祝福された感想は？」

「彼女は瞼を半分閉じ、視姦され嬲られる極上の愉悦に浸っていく。

「あうう……ひや、ひや いこうに気持ちよかつたれすわあ。……あ、あたひい、これで本当のみんなの淫乱オマンコ王女になれまひたあ。れすからもつろマゾ牝ソフィーに、オチンポくらひやいっ！」

「くつくつくつ、驚きですねえ、まだ物足りないというのですか？　さすがはみんなのオマンコ王女です。民達の数はたくさんおりますからね。まだまだ結婚式は終わりませんよ」ニヤリと嗤うハーフエルフは王女を持ち上げて群がる男達の前まで行き、両腿を広げて白く飾られた花嫁の全てを晒す。

「ほら、あなたからお願ひしなさい。私達を祝福して下さいとね」

「はいい、バルドひやまあ。……お願ひひます、あたひたちのお祝いとひてオチンポを、ザーメンをオマンコ王女ソフィーにたくひやんくだひやいっ！」

庭内にいる男共は二人を囲い、次から次へと逸物を露わにして、それぞれ呻きながらソフィエルの肉体を汚してゆく。狂宴はまだ始まつたばかりだった。

それから約三月の時が過ぎた。

この続編は製品版をご購入の上、
お楽しみください。

編集・発行
株式会社キルタイムコミュニケーション
〒104-0041 東京都中央区新富1-3-7 ヨドコウビル
TEL03-3555-3431(販売) / FAX03-3551-1208

※本作品の全部あるいは一部を無断で複製・転載・配信・送信したり、ホームページ上に転載することを禁止します。本作品の内容を無断で改変、改さん等を行うことも禁止します。また、有償・無償にかかわらず本作品を第三者に譲渡することはできません。

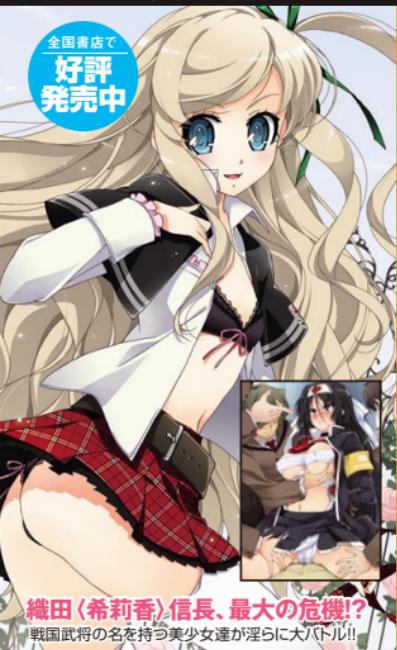
©KILL TIME COMMUNICATION Printed in Japan

<http://ktcom.jp/>

あとみっく文庫最新刊

ちょっと大人のライトノベル／毎月下旬ぞくぞく刊行中!! 定価／本体690円(税込)

全国書店で
好評
発売中



織田(希莉香)信長、最大の危機!?
戦国武将の名を持つ美少女達が淫らに大バトル!!

全国書店で
好評
発売中



吸血姫と狩猟者二人の影が闇を斬る
隔月刊コミックアルカリーワークスの人気連載漫画
が待望のノベライズ!!

既刊LINEUP ●仙獄学艶戦姫ノブナガツ! ①~②
全国書店で好評発売中

仙獄学艶戦姫ノブナガツ!
信玄・出陣!
[小説…斐沢嘉和／挿絵…SAIPACO.]

B-LANGEL 輪になりて踊る愚者の夜

[小説…夜士郎／原作挿絵…渡瀬行人]



2010 3下旬
発売予定!!

不死者を滅ぼす白刃が舞い踊る!

ちょっとマッドな聖女様が学園を舞台に大暴れ!!

●無敵の姫騎士がドMに目覚めたようです

●借金お嬢クリス ①~②
●プリンセスリバーン!! 交錯する美姫と魔姫

●ピルグリムメイテン 深紅の巡礼聖女



キルタイムコミュニケーション オンライン・カルナイト

<http://ktcom.jp/>

- ◎雑誌、コミック、小説の**通信販売**もやってるよ!
 - ◎二次元ドリームマガジン・コミックアンリアルの**バックナンバー**も買えるよ!
 - ◎**ジャンル別**で作品も選べて超便利!
 - ◎二次元編集部の愉快な**Blog**も更新中!
 - ◎期間限定で、文庫お買い上げの方に**オリジナルブックカバー**をプレゼント!



KTCの戦うヒロインオンリー漫画雑誌! 18禁ではないからこそ表現できるドキドキがある!!



二次元ドリームノベルズ
がアニメにも進出！ 新生
ブランド・クランベリーを
よろしく!!



二次元ドリームノベルズ
から生まれた美少女ゲー
ム! 「ミルフィーユ」ブ
ランドにて続々登場!



二次元ドリームノベルズ
が携帯電話で読める!
携帯サイト限定の書き下
ろし小説もあるよ!